

私たちが考える万博

第4回

コロナ禍後の社会に向けて
大阪・関西万博をどう考えるか

新型コロナウイルスが世界・日本に蔓延するなか、5年後に開催する大阪・関西万博は世界の人びとに何を伝えられるのか。社会・経済システムは大きく変化し、人びとの生活スタイルがこれまでとは一変する可能性がある。社会的価値観が変化し、たコロナ禍後社会における万博の意義について、池永寛明大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所顧問と考察する。

構成 加藤しのぶ



池永寛明
いけなが ひろあき
大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所顧問。1955年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部に勤務。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス入社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年に同研究所所長に。2019年より現職。

「コロナ禍」が示すこと 元社会には戻れない

122号より「私たちが考える万博」と題し、「大阪・関西万博2025」はどうあるべきかを考えてきましたが、新型コロナウイルスを契機とした社会の急変により、これまで想定してきた未来社会の姿を見直さざるを得なくなりました。

コロナ禍の先行きが見えないことから「不安」が社会に蔓延しています。その根底にあるのは「このまま元の社会に戻ることができないのでは？」という不安でしょう。しかし、ここではつきり言えるのは、新型コロナウイルスの蔓延が終息したとしても、世界および日本社会は「元の社会には戻れない」ということです。

それを象徴的に表しているのが、報道などで見る「コロナ禍」という言葉です。「禍」とは「わざわい」とも読みますが、「災」ではありません(左表参照)。

コロナ禍後の社会を見据えるなか、変えるべきことと変えてはいけないことを峻別し、それらを緊密に繋いで、持続的に成長させていくことが重要になります。長い間日本が承継してきた物事や文化と新たな技術・知識といった新旧の多様な事柄を融合して、新たな社会をつくってきた日本スタイルを發揮していく必要があります。

これは、本誌でテーマにしてきた「ルネッセ(再起動)」の概念そのものといえます。適合不全を起こしてしまっていた日本の社会状況がリセットされたことによって、忘れられてしまった大切なことを掘り起こして、それらを未来と融合して、新たな社会を築き磨き続けていく——そのためにも今は積極的な意味での冬眠の時期だとも思います。

この厳しい時期を乗り越えた社会は、より人間らしいものになっていくと願っています。

大阪・関西の芸で世界を掬う

「大阪・関西万博2025」の意義

コロナ禍と戦っているなか、「大阪・関西万博2025」のことなど考えられないという声が出てくるかもしれません。しかし、だからこそ「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマが実感を伴って迫ってくるように感じています。

緊急事態宣言下の4月の初め、新型コロナウイルスの感染拡大防止のために、聖徳太子ゆかりの大阪・四天王寺が593年の創建以

なく「禍」の字をあてていることに、今回の「わざわい」の本質があります。

2011年の東日本大震災という「災」害時も、絶望感、悲壮感といった社会を後退させる空気感に覆われました。しかし災害は、壊れたものは直せる、無くなったものはつくり直せるという思いのもと、復興に向けて努力ができた。従前通りとはいかなくとも「頑張れば元に戻る」という思いで前に進めた。ところがコロナ「禍」は、もはや「頑張ろうだけでは戻れない」状況であり、「どうしたらいいのか」という不安が募るばかりです。

今必要なのは、「コロナ禍後の社会・経済システムは大きく変わる」という前提で現状を捉え直すという視点です。今回は、コロナ禍後の社会がどう変わっていくのかを考察しながら、この近代最大の危機ともいわれる世界のこれらに向けて、大阪・関西万博は何ができるかを考えたいと思います。

コロナ禍後、どんな社会になるのか 社会的価値観の変化

何事も変わるためには大きなエネルギーが必要とします。しかし、過去の成功体験の慣性で変われなかった日本社会やビジネスのルールが、コロナ禍により強制的に変わる。代表的なのは、デジタルトランスフォーメーション(DX)の導入による社会変革です。最初はしっくりしなくとも、それが日常となれば慣れていきます。結果、今まで当たり前とされていた社会常識・基盤そのものを問い直され、社会的価値観が一変することとなります。

では、具体的に何が変わるのでしょうか。長期にわたる移動・外出制限は親子や家族の関係、生き方を見つめ直す機会となり、家と会社・学校と第三の場所の構造を大きく変え、生産・流通・消費の産業構造を変え、ライフスタイル・ビジネススタイル・ソーシャルスタイルを根本的に変えていくことは間違いありません。

来、初めての閉鎖を余儀なくされました。これが全国のニュースになった時、「聖徳太子って、大阪にいたの？」というネット上での反応が多く見られました。同時期に奈良の大仏(盧舎那仏)で知られる東大寺では「リモート参拝」として、疫病退散祈願などを動画サイトで配信し始め、驚くべき再生数を記録しています。日本中の若者たちなどの反応から、千年余にわたり「祈り」を続けてきた土地として、大阪・関西が注目されているの

ではないでしょうか。「祈り」という視点は、やはり「いのち輝く未来社会のデザイン」の創出の場としてふさわしいと思います。それも踏まえると、コロナ禍後社会づくりを目指して、「大阪・関西の芸で、世界を掬う」というテーマを掲げ、新たに万博を考えていけないかと考えています。

ここである「芸」とは何か。なぜ「救」ではなく、「掬う」なのか。次号以降でお話しできればと考えています。

コロナ禍で変わるもの

- 家・家族が変わる**
コロナ禍に伴う外出制限から、自宅、自宅周辺で大半の時間を過ごすこととなった経験は、親子、家族の意味が問い直され、「安らぎ、くつろぎ、幸せ」を求めるといった価値観を高め、職住一体・職住近接・多拠点という多様なスタイルが広がる。
- 仕事・会社が変わる**
テレワークが働く意味を変え、会社のカタチを変え、リモート技術・仕組みが家と会社の構造を変え、オフィスの形態を変え、オフィスのある街を変える。
- 都心・街が変わる**
集中へのリスク回避から、都市・都市機能が変化する。しかし従来のような、都市か地方・郊外といった一律的な「二項対立」ではない、人を主体とした第三の新たな多様な場づくりが模索されていく。

集中か分散の「二項対立」を離れた構造へ

